Webページの閲覧履歴の自動作成と共有の研究

97H025 金谷一馬

1　はじめに

近年、さまざまな情報がWebブラウザーで閲覧することができる。いつも使用している端末からだけではなく、いろいろな端末からWebページで閲覧する機会もある。その際に、過去に閲覧したWebページの一覧を閲覧したいときがある。Webブラウザーには、過去に閲覧したWebページの一覧を表示する機能はあるが、大学の演習室のような不特定多数のユーザが、複数のパソコンを使用する環境では、自分専用の履歴を閲覧することができない。

そこで、Proxyサーバのログファイルに Webページを閲覧した時のURLなどの記録が残されているので、それを用い自動的に過去閲覧したWebページの履歴をサーバ上で作成し、Webブラウザで閲覧できるようにする。

さらに、ユーザーにURLを登録してもらい登録してもらったURLを共有を他のユーザーと共有することを検討する。

2　研究内容

本研究では、去年の研究生が作成した個人別のWebページの閲覧履歴を作成Webページで閲覧出来るようにしたAuto Book Mark(ABM)の改良する。そして、ユーザーにURLとジャンルを選択して登録してもらい他のユーザーと共有しWebページで閲覧出来るのをEvreybody's Book Mark(EBM)と呼び、そのEBMの作成をする。

個人別のWebページ閲覧履歴のは、Proxyサーバーのログファイルより作成する。しかし、誰がどのWebページを閲覧したかユーザーを特定することができないので、Proxyサーバの設定をクライアントのidentデーモンを利用する設定に変更する。そして、ログファイルにユーザー名が記録されるようにする。Proxyサーバ上で、過去参照したURLの一覧を自動作成したものを、Webページで、ユーザーごとに閲覧できるようにするためにidentデーモンを利用してユーザーの識別を行う。

また、履歴の表示にURLの閲覧時期と閲覧回数により点数化して点数の高い順に表示する。それにより、良く利用するURL、たまにしか利用しないURLを区別でき探しやすくなる。

EBMでの登録にあたり、ABMを利用しユーザーにURL書き込みの手間をはぶいた。

3　まとめ

EBMは、ABMの機能を利用してユーザーの負担をへらし登録出来るようになった。

しかし、ジャンル登録の際にユーザーは、登録されているジャンルからしか選択ができず、現段階では管理側が新規のジャンルを作成しなくてはならない。ユーザーが新規のジャンルを登録ができれば、管理者側の負担が減る。

さらに、登録されたURLで利用されていないURL等を自動で消去することにより、EBMをよりスムーズに利用することが出来ると思われる。